

キリスト教は失
敗したのか？



キリスト教は失敗したのか？

キリスト教が成功か失敗かという問いへの正しい答えは、キリスト教の本質とは何か、また神が地上においてキリスト教に成し遂げさせようとした目的が何であったかを正しく理解することにかかっている。聖書はキリストを世界の救い主として示しており、論理的な結論として、神は世界がキリストに回心し、それによって死から救われることを計画されていたのである。イエスが人類のために死に赴いてからほぼ二千年が経過したが、世界は依然として回心から程遠い。キリスト教全体は急速に勢力を失い、国家単位で様々な宗教に背を向けている。この状況から神の計画は失敗したと判断すべきだろうか？

イエスの時代の弟子たちは、メシアの王国への希望を旧約聖書の預言に基づいており、その希望は、主に正しいものであった。彼らは、その王国の確立の時はまだ来ていないことを理解していなかった。それ以来の大半の自称クリスチャンも同様である。神がキリストと教会を通して世界の回

心を計画されたという彼らの信仰は正しいが、彼らは聖書から、この業が成し遂げられるべき時代が今ではないことを見抜けなかったのである。

イエスの直弟子たちが預言から、約束された王国の祝福が世界に訪れる前に、メシアが人の贖い主として苦しみ死なねばならないことを見抜けなかったように、公言するクリスチャンたちも聖書から、キリストの真の教会が将来の王国において人類を回心させ祝福する働きにキリストと共に参与する特権を得る前に、キリストと共に苦しみ死なねばならないことを見抜けなかったのである。使徒パウロはこの事柄を明確に述べている。「もし子であるなら、相続人でもあります。神の相続人であり、キリストと共に相続人です。ただし、彼と共に苦しむなら、また共に栄光を受けるためです。私は、今の苦しみは、私たちに現れる栄光に比べれば、取るに足らないものだと考えています。」 ローマ人への手紙 8:17,18

ここで言及されている栄光は、明らかにキリストのメシア的王国における共同相続人としての栄光である。この栄光に到達する者がまずキリストと共に苦難に耐えねばならないならば、それは教会の現在の使命がイエスのために世界を征服することではな

く、死に至るまで忠実に彼の足跡に従うことであることを意味する。

クリスチャンはイエスに従う

これはイエスご自身が弟子たちに教えたことである。例えば、イエスは幾度となくこう言われた。「だれでもわたしに従いたいと思う者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしに従いなさい」。彼らが死に至るまでイエスに従うべきことは、黙示録2:10のイエスの言葉によって明らかにされている。

「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える」。この忠実さが、迫害に直面した際の不屈の精神を意味することは、黙示録3章21節の約束によって示されている。

「克服者には、わたしが勝利を得たように、わたしが父の御座に坐っているように、わたしと共に御座に坐ることを許そう」

教会に全世界へ出て福音宣教せよという神の使命が与えられた時、その目的は弟子を作り、証しをすることであると明確に述べられています。この証しが世界を征服するためではなく、将来イエスと共に支配する働きに備えるためのクリスチャン自身の準備をもたらすものであることは、黙示録20章4節で明らかにされています。引用します：「イエスの証

しと神の言葉のために首を切られた者たちの魂を見た。...彼らは生き返り、キリストと共に千年の間、支配した。」

もしこの世における真のクリスチャンの使命が、単に真理の証しをすること（ ）であり、それによって得られた経験を通じて、千年王国期における世界を改宗させるという偉大な将来の働きに自らを準備することであるならば、キリスト教の表向きの失敗は容易に理解できる。実際、真のキリスト教は失敗していないことがわかる。単に多くの名ばかりの信者たちの偽りの希望が実現しなかっただけである。教会の現在の使命が世界を征服することではなく、犠牲と苦難にあると理解すれば、多くの不可解な疑問がたちまち解消される。

例えば、忠実なクリスチャンが通常、非信者よりも多くの苦しみを受けるのはなぜか、と疑問に思ったことはないだろうか。イエスが世の光として来られた後、人類が実際に長い暗黒時代（我々が今「暗黒時代」と呼ぶもの）に陥ったのはなぜか、と考えたことはないだろうか。今日、世界の非信者の数が一世紀前と比べて二倍以上になっているのはなぜか、と疑問に思ったことはないだろうか。このような疑問を抱いたことがない人などいるだろうか？多くの人は、こうした疑問の結果、キリスト教は巨大

な茶番劇であり、文明の基盤であり防波堤であるはずのこの宗教は、その主張を裏付けることに失敗したと結論づけている。

クリスチャンとは何か？

キリスト教に対する一般的な認識は、クラブに入会するのと同じような方法でキリスト教徒になるというものであり、それは死後に個人が恐ろしい苦痛の場所へ送られる神の怒りに対する一種の安全装置を構成するものとされてきた。したがって、神は誰もがこの恐ろしい運命から逃れるためにキリスト教徒になることを望んでいると考えられてきた。しかしより良き時代の明瞭な光のもとで、永遠の苦痛という悪夢が聖書に教えられていないことが明らかになりつつある今、キリスト教徒であることの真の意味を理解する道筋が次第に明瞭になってきている。

「キリスト」という言葉は、ヘブライ語の「メシア」をギリシャ語に翻訳したもので、新約聖書においてイエスを旧約聖書全体に見られる輝かしいメシア的約束群と結びつけるために用いられている。これらの約束の最初のものは、エデンの園で神が「女の実りが蛇の頭を砕く」と語った時に与えられた。もう一つの、より具体的な約束は、アブラハムに「あなたの子孫によって地上のすべ

ての民族が祝福される」と告げられた時に与えられた。

イエス・キリストは、全人類を祝福する約束の子としてこの世に来られました。聖書は、死に至るまで自己犠牲の歩みを忠実に追うことによって真のクリスチャンとなる者たちが、約束の子であるキリストと一体となることを示しています。

使徒パウロは当時のクリスチャンにこう記している。「あなたがたがキリストのものであれば、約束によるアブラハムの子孫であり、相続人なのです」

（ガラテヤ**3:29**）。コリント人への手紙では、キリストは「一つの肢体ではなく、多くの肢体」であると述べている。この二つの声明で使徒が提示する点は極めて重要である。それらは、クリスチャンの選抜と育成において、神が単に将来のメシア的目的——すべての国々を祝福するという目的——に関連する準備作業を進めているに過ぎないことを示している。つまり神は全人類をクリスチャンにしようとしているのではなく、諸国民の中からごく少数を選び出し、イエスが将来行う全世界（生者と死者双方）を祝福する働きに参加させるためである。

選ばれた民

今日、神がメシアと共に治めるために選ばれているクリスチャンとは誰か。どの教会に彼らはいのか。彼らが誰であるかは神が裁かれる。具体的には、自分が罪人であり神から離れていたことを認め、悔い改め、キリストの流された血への信仰を通して、自分の時間、才能、持っているものすべてを主に完全に献身し、忠実にその献身を実行しようと努めている者がクリスチャンである。教派の教会会員資格は全く関係がない。

使徒行伝第十五章には、この時代の忠実なクリスチャンを選ばれる神の御計画に関する啓示的な記述がある。使徒は「神はまず異邦人を訪ねられた」と説明するが、それは彼ら全員をクリスチャンにするためではなく、「御名の民」——すなわち真のクリスチャン——を彼らの中から取り出すためであった。使徒は、その後神の恵みがイスラエルに再び注がれ、崩れ落ちた「ダビデの幕屋」が回復されると宣言する。そしてその時こそ、「残りの人々」、すなわち異邦人たちが「主を求める」機会を得るのだと述べている。まず、御名のために民を選び出す働き——すなわち、完全に奉獻されたクリスチャンすべてから成るキリストの花嫁——が完成されねばならない。使徒15:14-18

このように、神がこの時代において全世界がクリスチャンになることを意図していないと理解すれば、これまで非常に理解が困難だった聖書の多くの箇所を理解する助けとなる。例えば、黙示録5:10では、キリストと教会の将来の支配が地上で行われると述べられている。もし教会以外のすべての人々が地上から取り去られ、燃える地獄で永遠に苦しめられるのなら、どうしてこれが真実となり得るだろうか？ それでは聖徒たちは、この地上において、いったい誰の上に支配するのだろうか？ この難問は、聖書から真の教会が完成した後、世界は呪われるのではなく祝福されることを悟るときに消え去る。

このように見ると、神の救いの計画は教会と世界の双方に機会を与えるものであり、神の定めへの協力の有無にかかわらず全てが救われるわけではないことが分かる。聖書は明確に、真理を完全に知った後で故意に罪を犯す者は永遠の滅びをもって罰せられると示している——しかしそれは、中世の教義が提示するような、苦しみの中での永遠の存続ではない。

真の教会の報い

神の選びによるキリスト教教会が、キリストのメシア的王国においてキリストと共にあることに関連して、もう一つの興味深い点は、そのような忠実なクリスチャンが、一般世俗よりも高い報いを受けることである。神が世に備えられたのは、地上での命への回復である。それは世界の創世以来備えられていた王国、すなわち地上の低次の被造物に対する支配権の回復である。しかしキリスト教徒に対しては、主はこう約束された。「わたしが行って、あなたがたのために場所を備える。...わたしがいる所に、あなたがたもいるためである。」（ヨハネ14:2,3）教会は天の報いを受けるが、後述するように、神が全人類を天に迎えることを意図されているわけではない。

贖い主の流された血による永遠の命の展望こそが、聖書において教会と世界の両方に示された祝福の希望である。聖書が提示するのは、義人には天国、悪人には永遠の苦痛という構図ではなく、むしろ命か死かという選択である。

最初の人アダムは背き、命を失った。しかしやがてイエスが人の身代金として来られ、十字架上の自らの死によって死の罰を償われた。この結果、世界

は再び生きる機会を与えられる。この機会は今が来ればすべての人に訪れますが、この福音時代においては、完全に奉獻されたクリスチャンだけが贖い主の死から実際に完全な恩恵を受ける機会を持っています。彼らはイエスに従い、自らを犠牲として捧げることで、単なる命だけでなく不死の命という報いを受けます。これこそが「栄光と誉れと不死を求める」者たちなのです。(ローマ 2:7)将来の王国時代において、人類の世界の従順な者たちにも生きる機会が与えられるが、彼らが受ける命は、アダムが失った回復された人間の命である。従順な者たちはその後永遠に生きるが、それは彼らが不死になるからではなく、神が彼らの命を支え続けるからである。

世界が改心しない理由

真のキリスト教の働きは、これまでメシアとの共同相続者たる者たちを、その長く約束された王国の大いなる業に備えることに過ぎなかった。この観点からすれば、キリスト教時代を通じて世界の回心という試みがほとんど進展しなかったのも不思議ではない。創造主は、人間の立場から見ればキリスト教は失敗に見えることを知っておられた。イエスご自身が、この時代の終わりについて言及されたとき、「人の子が来るとき、地上に信仰を見いだすだろう

か」(ルカ18:8)と言われた。したがって、今日の世界で聖書を真に信じる者がごくわずかであるという事実は、神にとって驚くべきことではない。神の愛する御子、世界の贖い主は、まさにこの状況を予見し、予告されたのである。これが、私たちが聖書の言うことを信じるべきもう一つの良い理由である。

いわゆるキリスト教諸派の数百もの分裂もまた、預言の言葉によって予告されていた。パウロは、真の信仰からの大いなる背信が起これと述べ、これは確かに現実のものとなった。

もしイエスとその使徒たちが、人類全体に好意的な影響を与えるという 目的のために、何らかの利己的な計画を押し通そうとする欺瞞的な集団であったなら、彼らは自ら進んで、その計画全体が間もなく失敗し、彼ら自身は何百万もの人々の心の中で笑いものになるだろうと予言しただろうか？そのような悲観的な予言は、初期の信者たちをあまり励ますものではなく、多くの人々をその運動に参加させることもなかっただろう。世俗の知恵はこう言うだろう。「未来をできる限り明るく描け。さもなくば多くの改宗者を獲得することは決してできない」と。

イエスと使徒たちは世俗的な知恵に導かれてはいなかった。彼らはこの時代に福音を宣べ伝える目的が、巨大で威厳ある教会組織を築くことではないと完全に理解していた。彼らは、単に福音を宣べ伝えることが今すぐに世界をイエスの足元に導くことを神が意図していないことを知っていた。彼らは予見していた——真のクリスチャンの小さな群れが祝福の未来の働きのために集められ備えられる一方で、全体として誤った道を歩む男女が主が教えた栄光の真理を歪め、その結果キリスト教は敗北したように見えるだろうと。

しかし、真のキリスト教が失敗しなかったこと、この時代における神の計画が成功裏に達成されつつあること、そして今や新王国への準備作業がほぼ完了しようとしていることを、私たちはどれほど喜ばしいことか。実際、神の目的において、イエスと共にメシアの王国で統治する真のクリスチャンを招き備えるために定められた期間が終わりに近づいていることを示す聖書的証拠は数多く存在する。ならば、私たちがこの時代の終わりと新たな時代の始まりにほぼ到達したことを示すいくつかの証拠を考察することは、私たちの心を喜ばせるべきである。その新たな時代には、死にゆく世界に約束された平和と命の祝福が与えられるのだ。

世界の唯一の希望：回復

全人類が完全な健康と幸福、永遠の命へと回復され、全世界がエデンの園のような住処となること——これが創造主の御言葉である聖書に記された明確な目的である。理性はこれが当然の帰結だと告げている。もし神が地球を人のために、人を地球のために創造されたのなら、欺瞞と反逆という対立する力が永遠に神の慈愛に満ちた計画を阻むことを許されるとか、あるいは神が人間の被造物の一部を救うために別の生命状態へ移すという代替案を余儀なくされると考えるのは、論理に反するでしょう。

神が人を創造し、あの素晴らしいエデンの園を与えた時、与えられた使命は「増えよ、満ちよ、地を治めよ」というものだった。アダムとエバが死ぬと天国に行くことなど一切語られていない。実際、創造主の律法に従う限り、彼らに死は訪れようとしなかったのだ（）。

彼らは地上で生き、死ぬことはなかった。子孫をもって満たすべきは天ではなく、地であった。ならば想像してみてもいい——もし罪と死がこの世に現れず、神が命じられた通り、原初のエデンの楽園が全世界へと拡大されていたなら、この地球上にどれほど輝かしく理想的な状態が実現していたかを。

全世界に広がる樂園を想像してみてください。そこには完全で幸福な人類家族が満ち溢れ、皆が永遠の命と創造主の永遠の恵みを享受しているのです。この現実的で祝福に満ちた恩恵こそが、人類にまだ訪れるべきものであり、イエスの死によってそのような回復が備えられているのです。

回復の約束

創世の初め、神が「女の子孫が蛇の頭を砕く」と言われた時、それは蛇の死をもたらし働きが滅ぼされ、人間が創造主に背くことで失いかけていた状態に回復されることを意味していました。神がアブラハムに「あなたの子孫によって地上のすべての家族が祝福される」と告げられた時、それは実際にはアダムの子孫すべてへの回復の約束でした。

天使がイエスの誕生を告げ、「ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方は主キリストである」と言ったとき、それは全世界が死から救われ、地上に命を回復される機会を得ることを意味していた。（ルカ2:11）イエスが弟子たちに「御国が来ますように。天におけるごとく地においても御心がなされますように」と祈るよう教えたとき、彼は単に神の王国の真の究極的な目的——失われた人間の状態の回復—

—を彼らに思い出させたのです。この祈りを口にしたすべてのクリスチャンは——自覚していようといまいと——地上における樂園状態の回復を祈ってきたのです。

私たちの主と使徒たちが、すべての忠実なクリスチャンに対して、イエスと共に相続人となり、彼と共に支配すると約束したとき、それは究極的には、彼らがアブラハムの霊的な子孫として、回復された命という約束の祝福を配る栄光ある働きを、イエスと分かち合うことを意味していました。(黙示録 5:10)聖書が「神の恵みにより、イエスはすべての人のために死を味わわれた」と語る時、それは原罪ゆえにすべての人に課せられた死の刑罰が、やがて取り除かれ、完全な地上で再び生きる道がすべての人に開かれることを意味する。— ローマ 6:23; ヘブル 2:9

この回復の業を成し遂げるために、教会もまたイエスと同様に、本質と栄光の双方においてこれほど高い地位に高められるのである。神が全世界を教会に招き入れ、地獄の火から救おうと試みてきたという暗黒時代説よりも、キリストの教会にとってこれほど素晴らしい栄光の希望があるだろうか！

キリストの再臨に続くのは、この栄光に満ちた回復、すなわち復元の業である。使徒ペテロは使徒行伝**3:19-23**でこれを示している。ここに記された発言の直前に、ペテロは幼い頃から足の不自由な男を癒やした。この出来事を例えとし、また聴衆に伝えようとする重要な教訓の根拠として、彼はこう語った。「だから、悔い改めて、心を改めなさい。そうすれば、主の御前から来る、さわやかな時が訪れ、あなたがたの罪が消し去られるでしょう。主は、あなたがたに以前宣べ伝えられたイエス・キリストを遣わされます。この方は、天地創造以来、神の聖なる預言者たちの口を通して語られてきた、すべてのものの回復の時が来るまで、天に迎え入れられるのです。」なんと包括的な預言であろうか、万物の回復とは！キリストの再臨に続く結末が、従来想定されていた地上帰還後の破滅とは、なんと異なることか。

主の御臨在から来るのは、暗澹たる苦痛の時ではなく、さわやかな時である。「御臨在から」という表現は、ギリシャ語では文字通り「その御顔から」を意味する。これは、他者に背を向けることは不快の証しであるが、他者を見つめることは友と見なしていることを示すという、東洋的な観念に基づいている。この預言で使徒が用いた表現は、なんと深い

意味に満ちていることか！エデンの園で、神は御自身の律法が破られたため、御自身が創造した人間に背を向けた。「主の恵みには命がある」と預言者は言う。しかし世界は罪のために神の恵みを失い、日光と雨を奪われた花のように、人々は枯れ果て死んだ。詩篇30:5

約束は必ず成就する

比喩的に言えば、神は六千年以上もの間、人類に背を向けてこられた。しかしそれでもなお、神は将来の祝福の時に関する約束をされ、また約束された事柄のための準備を進めてこられた。キリストの再臨と御国の確立は、これらの約束が成就し始める時を示す。このゆえにペテロは、その時神が人類に向き直り、その結果として「さわやかな時」が来ると告げている。

使徒はまた、世界の初めから神の聖なる預言者たちの口を通して語られてきた「すべてのものの回復の時」が来ると述べている。人間が失ったのは地上の完全な生活であり、回復されるのも地上の完全な生活である。天に一度も存在したことのない世界が、どうして天に回復されようか。神の聖なる預言者たちは皆、苦しむ人類と滅びゆく世界のために、この来るべき祝福の日々を予告してきたのだ

！砂漠が花咲き、天にいちじくの木が生えるとは、不思議に思ったことはないか？旧約の預言者たちが記したのは、まさにこのような地上の事柄であった。今や私たちは、彼らのメッセージが確かに、回復された樂園における地上の命と幸福の祝福に属していたことを理解する。

ペテロが足の不自由な一人の男を癒したことは、単にメシアの王国が確立された時に、すべての人々に対して同様の回復がもたらされるという事実の例示として用いられたに過ぎない。例えばイザヤは、王国の時が来れば「足の不自由な者は鹿のように跳びはねる」「口のきけない者の舌は歌う」「耳の聞こえない者の耳は開かれる」「目の見えない者の目は開かれる」と預言した。(イザヤ書35章) こうした回復の祝福は、身体に障害を持つ不幸な者たちだけでなく、それを望むすべての者に及ぶ。また「神の栄光の知識」が「海を覆う水のように」地上を満たす時、霊的な盲目も取り除かれる。**イザヤ書 11:9; エレミヤ書 31:34**

メシアの王国は預言において山として象徴される。ダニエルが予言したこの山のような王国は、やがて全地を満たすほどに成長する。**ダニエル書 2:34,35,44** この同じ山は預言者ミカによって言及されており、そこにはこう記されている。「しかし、

終わりの日には、主の家の山が山々の頂に確立され、丘々よりも高く上げられ、人々がそこへ流れ込む。多くの国々が来て言うであろう、『さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。主が御道を教え、私たちがその道を行くように。律法はシオンから出て、主の言葉はエルサレムから出るからである』と。主は多くの民を裁き、遠くの強い国々を戒められる。彼らは剣を鋤に、槍を鎌に変え、国は国に対して剣を振るわず、もはや戦いを学ぶことはない。人々は皆、自分のぶどうの木といちじくの木の下に座り、誰も彼らを恐れることはない。万軍の主の口がこれを語られたからである。」ミカ書4:1-4

終わりの日

前述の箇所 で用いられている「終わりの日」という表現は、地上における罪と死の支配の終焉の日々、そしてメシアの直接の統治のもとで新しくより良い秩序が確立される時期を描写している。終わりの日に関する暗黒時代の想像は、この聖句や他の希望に満ちた聖句と照らし合わせると、全く誤りであることがわかる。例えば、終わりの日がすべての希望と悔い改めの機会の終焉を告げるのではなく、預言者は全く逆の情景を描いている。神が民に御自身の道を教え、民が神の道に歩むと述べている。彼らは自己中心的で好戦的な傾向を止め、平和と善意の促

進に時間を捧げるようになる。国は国に対して剣を振るわず、もはや戦いを学ぶこともない。

メシアの王国の詳細な仕組みは聖書にすべて明かされているわけではないが、無数の天体を創造し今なおその秩序ある運動を支配する神聖な力と誤りのない知恵が、現在の罪と利己主義の破滅の直後に、神の愛の律法の知識が地の果てまで徹底される王国の方法の保証を与えると確信させられる。

ミカ預言の象徴は、当然ながら預言者自身が親しんだ事物に基づいている。槍や剣は現代の有効な戦争手段としてはあまり流行していない。もしこの預言がより近代に書かれたならば、潜水艦、飛行機、毒ガス、核戦争が言及されていたに違いない。

同様に、ぶどうの木といちじくの木の比喻は、キリストの王国が完全に機能する時、すべての人の生活必需品と快適さが十分に保証されるという確信に基づく平和と満足を表している。抵当権のない快適な家、何一つ欠けるものがない状態こそが、現代における同じ栄光の状態の概念であろう。

。

回復の時代に関する別の興味深い預言を引用しよう。「この山（王国）において、万軍の主はすべて

の民のために、肥えたものの饗宴、澱の上のぶどう酒の饗宴……よく精錬されたものを備えられる。この山において、万民の上に投げかけられた覆いと、すべての国々に広げられたベールを主は取り除かれる。死を勝利のうちに飲み込み、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい去り、その民への責めを全地から取り除かれる。主が語られたからだ。」 イザヤ書 25:6-8

この心を励ます回復の祝福に関する預言に記されている以上に、何が求められるだろうか。「すべての国民の望みが来る」時、それはまさに祝宴となるであろう。（ハガイ書 2:7）この祝宴は、メシアの王国がもたらす命を回復し、命を保つための備えを象徴している。

「古き蛇」の盲目的な影響を象徴するベールは、その時取り除かれる。黙示録の著者が指摘するように、サタンが縛られて諸国民を惑わすことがなくなるため、これが可能となるのだ。 黙示録 Revelation 20:1-3

死は勝利に飲み込まれる！死こそが世界に入り込み、すべての幸福を破壊した。しかし「失われたもの」は回復されるため、死は滅ぼされねばならない。

黙示録21:4には「もはや死はない」と記されている。過去の難点は、多くの者がこれらの栄光に満ちた地上の約束を天国に当てはめようとし、この時代における主の真の足跡をたどる者たちだけが天の報いを受けるという事実を見落としていたことである。死が支配してきたのはこの地上であり、したがって死がもはや存在しなくなるのもこの地上である。

その時、人々はどれほど喜びながら、命と救いという王国の祝福を受け入れることか！預言者がこの点について語る言葉に注目せよ：「その日、ここにこう言われるであろう。『見よ、これが私たちの神である。私たちは彼を待ち望んだ。彼は私たちを救う。これが主である。私たちは彼を待ち望んだ。私たちは喜び、彼の救いを喜ぶ』」 イザヤ書 イザヤ書
イザヤ書25:9

実に、何百万もの人々が、真の神に対するより深い理解を切望し待ち望んできた！また多くの人々が、神のみが与えうる救いを願い、祈ってきた！世界は神の恵みが再び訪れる日の出を待ち望んできた——おそらく無知のうちに待ち、それがいつ、どのように訪れるのかほとんど理解せずに。大いなる欺き者の眩惑する影響が取り除かれ、神の栄光の知識が地を満たす時、世界はついにその

神を知り、心から熱心に神のもとへ帰還するであろう。

神の強大な力

神が人類のために成し遂げると約束された事柄の途方もない大きさに、誰も信仰を揺るがされてはならない。今我々が論じているのは、全知全能の永遠なる宇宙の創造主が約束されたことであることを忘れるな。最初に命を生み出した神は、約束を果たすためにそれを再び生み出す力を十分に備えている。

この回復は、死にかけている者だけでなく、死者をも含む。聖書の復活の教えが指し示すのはまさにこれである。この驚くべき（復活）の教義は、死が存在しないとする伝統的な理論によって無効にされてきた。死んでいなければ、どうして死者からよみがえり得ようか。不滅の魂という伝統に目がくらまされた混乱した世界が、この単純でありながら魂を満たす回復の希望を理解することは、なんと全く不可能であったことか！今や神に感謝せよ、私たちは救いの本質を見ることが出来る。それは死からの目覚め、地上における命への回復を意味するのだ。聖書は死を眠りと描き、やがて訪れる新たな日の夜明けに、すべての人々が目覚め、新たにされることを示している。神が定

めた時代の時計はすでに早朝の刻を告げている。闇はまだ濃いものの、日は急速に近づいている。そう、それはまさに目前に迫っているのだ。

最も驚くべきは、この命を与える回復の祝福がまさに目前に迫っているという事実だ。それを信じるのに過剰な信仰は必要ない。聖書の預言者たちは、現在の世界情勢—神の王国が確立される直前に訪れる状況—を驚くほど正確に予言してきた。それゆえ、私たちが今や現実として受け入れている事柄を預言的に語る際に導いたのであろう同じ神の力と知恵が、目前に控えるさらに驚くべき事柄を予言する際にも導いたに違いないと信じるのは難しくない。

さあ、我々の前に広がるこの励みとなる展望を喜びましょう。そして、来るべき喜びの幻が、現在の試練を忍耐強く耐え忍ぶ力を与えてくれますように。罪と死の支配は、世界全体にとって長く疲れる夜であった。しかし個人にとっては時は速やかに過ぎ去り、その経過と共に、誰もが非常に貴重な教訓の礎を築いてきた。もし今、賢明で慈愛に満ちた創造主が、まさに御自身とその律法への感謝を深めるために悪の支配を許されたのだと悟ることができれば、私たちは忍耐強く待ち続け、

新たな日の到来を祈り続けることができるだろう

。